

雜 錄

朝鮮の温泉^{*}(其一)

齋 藤 信 房

- (1) 序 言
- (2) 朝鮮の温泉に関する文献
- (3) 温泉の分布
- (4) 温泉に関する歴史と傳説

序 言

高勾麗花崗岩系と呼ばれる片麻岩類、佛國寺統と稱へらるる花崗岩類、更に若干の火山岩類並に水成岩類を以て構成せらるる朝鮮半島には、其の數四十に垂とする温泉が點在する。

本邦内地に於ける温泉群が百花咲き亂るるの偉觀を呈してゐるのを知る人々に、此等半島の温泉は一抹の寂寥を感じしめずには置かぬのではあるが、之は内地に於ける温泉が、其の數に於て、泉質に於て、世界に冠絶するがために外ならないので、決して朝鮮が温泉に恵まれて居らぬ譯ではないのである。

然しながら其の數に於てあまりに少數なる爲からか、或は其の泉質の單純に過ぎる爲からか、半島の温泉は現在に至る迄餘り世人の注目を引いた事は無く、従つて内地の人々にはその名すらも殆ど知られて居らぬ様である。

本邦内地に於ける温泉が數多の温泉科學者に依つて鋭き科學的検討を加へられつゝある時、朝鮮の温泉に就て若干の紹介を試みるのも意味がなくなからうと考へるので淺學をも省みず此の小文を草する次第である。

朝鮮の温泉に関する文献

朝鮮の温泉に関する古い記載は、東國輿地勝覽、慵齋叢話其他の舊記に屢々見らるる所であるが、就中東國輿地勝覽は李朝第九代成宗の十三年(1482年) 盧思慎をして選述せしめ中宗の庚寅(1530年)更に李荇等に命じ之を増補訂正せしめたものであつて、十三道の

* こゝでは狹義の温泉を考へ冷泉は含めない。

各温泉に就き若干の記述をなしてをり朝鮮の温泉に關する最古の記録とも言ひ得るが、内容は白髮三千丈式の古色蒼然たるものである。近時に至り大正七年二月朝鮮總督府警務總監部衛生課の名を以て朝鮮鑛泉要記が發行せられたが、之が鑛泉に對する最初の綜合記録とも稱すべきものであらう。之と相前後して温泉、冷泉或は藥水に對する研究が興れはじめ、大正六年には朝鮮總督府中央試験所の今津明氏¹⁾に依り鑛泉のラドン含量の測定が行はれ、又同じく中央試験所の中川虎太郎、石倉昇兩氏は忠清北道清州の椒井里炭酸泉に就き化學的調査を行つてゐる。大正十一年より朝鮮總督府地質調査所²⁾は、朝鮮内の主要温泉に就て主として地質學的並に化學的調査を行ひ、此處に初めて信頼すべき温泉の科學的調査研究が爲されたのであるが、此の調査に挺身せられた駒田亥久雄氏の業績は大なりと言はねばならない。大正十三年中村新太郎氏³⁾は朝鮮の温泉に就ての綜説を雑誌『地球』上に載せてゐるが、短い中にも學者としての面白い觀察が爲されてゐる。昭和年代の初めには立岩巖氏⁴⁾が忠清南道溫陽温泉に就きラドン含量其他を調査し、更に昭和六年黃海道廳は黃海道勢一斑の附録として黃海道内諸温泉のラドン含量に就き報告してゐる。昭和九年理化學研究所飯盛里安、吉村恂、畑晋三氏⁵⁾は、朝鮮に於ける放射性鑛物探査の折、同時に鑛泉のラドン含量の測定を行ひ鮮内に於ける放射性元素の分布に關し示唆に富める所説を發表してゐる。又山澤三造氏⁶⁾は化學成分上より見た朝鮮の温泉の特質に就いて朝鮮化學會々報上に若干の考察を述べたが、此の頃より温泉に對する研究熱は漸く盛となつて朝鮮總督府の注目する所となり、警務局衛生試験所は昭和十三年より五ヶ年計畫を以て全鮮の温泉調査を開始し、其の成果は温泉調査報告と題して朝鮮藥學會誌上に十四回に及んで載せられてゐる。此の調査は川口利一氏を中心として行はれたものであるが、全鮮の温泉に就き名稱所在地、湧出狀況、源泉の化學的性質、更に其の温泉の沿革、風致、氣候、交通設備等を克明に調査記述したもので誠に貴重な文獻と言ふべきである。

如上の諸報告と共に忘れてならぬものに厚生省衛生試験所の衛生試験所彙報¹⁰⁾があり、本彙報の第十二號には三種、三十四號には九種、五十四號には四種の朝鮮内鑛泉の分析が掲げられて居る。忠清南道の溫陽温泉が明治三十九年東京に於て既に分析されて居ることなどを思ふと、我々は朝鮮の温泉についても厚生省衛生試験所の勞を多としなければならない。昭和十六年日本温泉協會編の日本温泉大鑑も朝鮮の温泉に就き比較的新しい記載を行つてをり一讀に價するものである。

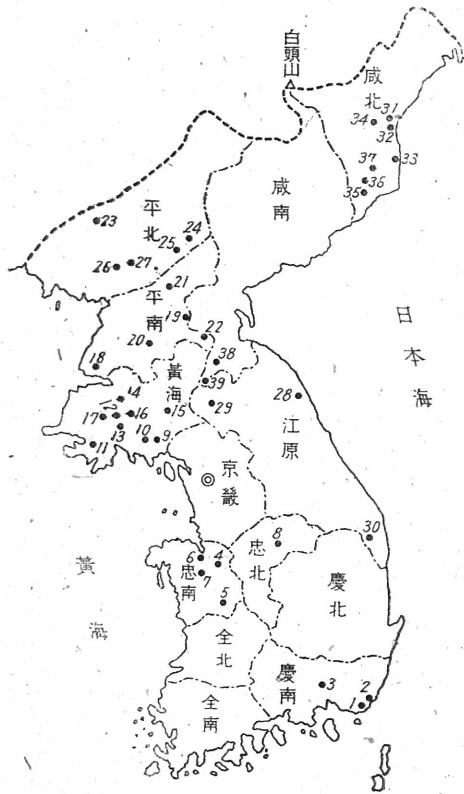
一方、ラドン以外の微量成分に關する研究も近時漸く行はれつゝあり、温泉の弗素含量に就き須川豐氏¹¹⁾の研究が朝鮮醫學會誌上に發表せられたのを最初にラヂウム含量に就き中

井敏夫氏⁽¹²⁾、岩瀬榮一氏⁽¹³⁾並に齋藤信房の研究、更に礬酸含量に就き多賀谷健夫氏⁽¹⁴⁾の研究等が存するが、此等は未だ一二温泉に對する僅かな測定結果に過ぎず、精細な温泉化學的研究はすべて今後に俟たねばならない状態である。尙最近生物學の方面から温泉植物に關する江本義麿、廣瀬弘幸兩氏⁽¹⁵⁾の研究が發表せられてゐる。

温泉^{**}の分布

鮮内の温泉の數に就ては、今迄種々異つた數字が擧げられてゐる。即ち駒田友久雄氏⁽³⁾は五十一箇所、中村新太郎氏⁽⁴⁾は四十七箇所、山澤三造氏⁽⁸⁾は五十二箇所を擧げて居るのに對して、衣笠豊松尾仁兩氏は昭和十五年八月の調査として三十二箇所を數へて居る。然し此等の數字には現在湧出して居らぬ温泉や温泉として公認されぬもの等を含んで居るのであつて筆者が最近少しく調査した結果に依ると其の正確な數字は三十九箇所と言ふべきである。之等温泉の分布及び名稱は第1表及び第1圖の如くであるが、之を各道別に觀察する

第1圖 朝鮮温泉分布圖(數字は第1表を参照)



ならば半島中西部の黄海道の九ヶ、北東部の咸鏡北道の七ヶが最も多く、平安南道、平安北道之に次ぎ、更に忠清南道、慶尙南道、江原道、咸鏡南道、忠清北道の順序となり、全羅南道、全羅北道、慶尙北道及び京畿道には温泉の湧出を見ない。朝鮮の大都市京城を擁する京畿道が温泉を一つも持たぬのは些か淋しき感があり、其の爲でもあらうか曾て利川温泉などの存在が喧傳せられた事もあるが、現今温泉として承認されたものはない。

温泉に關する歴史と傳説

何處に於てもさうである如く朝鮮の温泉にも其の發見に纏る傳説や温泉場の變遷の歴史があるのであるが、之等は僅に東國輿地勝覽、慵齋叢話等に見えるものの外は其の村々の古老が語り繼いでゐ

** 嚴密に言へば温泉場の分布である。

第1表 朝鮮の温泉

温泉名	所在地
1 東萊	慶尙南道東萊郡東萊邑温泉里
2 海雲臺	慶尙南道東萊郡南面中里
3 馬金山	慶尙南道昌原郡北面新村里
4 溫陽	忠清南道牙山郡溫陽面温泉里
5 儒城	忠清南道大德郡儒城面鳳鳴里
6 道高	忠清南道牙山郡道高面基谷里
7 德山	忠清南道禮山郡德山面社洞里
8 水安堡	忠清北道槐山郡上老面温泉里
9 白川	黃海道延白郡銀川面瀕川里
10 延安	黃海道延白郡溫井面錦城里
11 馬山	黃海道甕津郡甕津邑温泉里
12 三泉	黃海道信川郡弓興面三泉里
13 達泉	黃海道信川郡草里達泉里
14 安岳	黃海道安岳郡銀紅面温井里
15 平山	黃海道平山郡積岩面温井里
16 信川	黃海道信川郡温泉面温井里
17 松禾	黃海道松禾郡蓮井面温水里
18 龍岡	平安南道龍岡郡海雲面温井里
19 石湯池	平安南道陽德郡温泉面温井里
20 龍澤	平安南道成川郡靈泉面龍澤里
21 溫和	平安南道寧遠郡温和面温陽里
22 陽德	平安南道陽德郡九龍面龍溪里
23 溫豐	平安北道朔州郡朔州面温豐洞
24 新館	平安北道熙川郡新豐面南洞温下站
25 洞	平安北道熙川郡長洞面元興洞温水站
26 石倉	平安北道寧邊郡南松面沙川洞
27 溫井	平安北道雲山郡委延面沓下洞
28 金剛山	江原道高城郡外金剛面温井里
29 葛山	江原道伊川郡方丈面龜塘里温泉洞
30 白巖	江原道蔚珍郡温井面温井里
31 朱乙	咸鏡北道鏡城郡朱乙面仲郷洞
32 金田	咸鏡北道鏡城郡朱乙温面龍郷洞
33 上古	咸鏡北道明川郡上古面黃津洞温水坪
34 甫上	咸鏡北道鏡城郡朱乙温面甫土洞
35 細川	咸鏡北道城津郡鶴西面細川洞
36 松興	咸鏡北道城津郡鶴上面松興洞
37 溫水坪	咸鏡北道吉州郡英北面表峰洞
38 馬場	咸鏡南道永興郡仁興面松峴里
39 清溪	咸鏡南道德源郡豐下面清溪里

るものが多い。加藤玄智氏等は温泉の傳説を噴泉傳説、發見傳説、入湯傳説等に分けて居るが、朝鮮の温泉に就て知られて居るもの多くは發見傳説であり、其の發見傳説に登場する主人公が王侯貴族、仙人、獵師や亡命者、さては鳥獸である點は内地と殆ど變りは無い。

只朝鮮人は入浴を好まず、かへつて所謂藥水と呼稱する天然の湧水を殆ど迷信的に飲用する風習のみが盛である故か、古への入湯者は大體貴族や有産階級に限られ一般庶民にはあまり温泉に對する關心が高まらなかつたと思はれるのであるが、此の一事が温泉の發見や開發に影響してゐる事は疑を入れない。切角一度開發された温泉を埋めて仕舞うた例などは案外多く、如何にもものぐさで入浴嫌ひな鮮人の一面を表はすものとして面白い。

發見の時代はと言ふに、遠く新羅とか百濟の時代から其の存在を知られた温陽や東萊などを除くと、大多數の温泉は今から約三百年乃至五百年前に發見せられたものであるが、一方最近に至つて發見せられた白川温井、馬金山等の如き温泉もある。

今此等の事柄を前置にして各地の温泉史や傳説を尋ねると誠に興趣深いものがある。

朝鮮の表玄關釜山府の近郊にある東萊温泉は一千有餘年の温泉史を有する點に於て著名

であるが、東國輿地勝覽卷之二十三には『温井』と記し、『在縣北五里。其熱可熟鷄子。帶病者浴之輒愈。新羅時王屢行于此。甃石四隅立銅柱。其穴猶存』とある。又朴孝修なる者は詩を賦して、

洞房深處開石塘	淨漾十斛盈汪汪
深可齊腰僅二尺	温煙暖霧蒸其傍
晝燭紅燈照水底	半揎香袖扶入湯
愧煩纖手洗鮎背	垢賦鱗甲消雪霜
快如麻姑爬癢處	熱汗發面流清漿
浴罷徐々拭白紵	鬢髮頽然臥一床
身輕骨爽若換髓	何羨飄飄鶴背翔
頓忘身世得甘寢	恍惚夢游何有鄉
覺後還爲行路客	驛騎塵土汚衣裳

とうたつてをり以て往時の盛況を察するに足る。

然し東萊の如く連続せる温泉史を持つものは案外少いのであつて、切角温泉場としての繁榮を約束されながら埋没の悲運に會うてその發展を一時妨げられたものも多い。東萊に程近い海雲臺温泉がそれである。海雲臺は今日は近代的設備を施した温泉場として人口に膾炙して居るが、口碑の傳ふる所に依れば曾て朝鮮高官の來り浴する者多く、其の都度在住民に對する賦課の多いために地方民が之を嫌ひ、遂に源泉を埋没した時代などもあつたらしい。埋没事件の多い原因が朝鮮人の入浴嫌ひに影響されてゐるのはもとよりではあるが、一面又かゝる爲政者の惡政も與つて力ある事はあまり賞めた事ではない。

慶尙南道のもう一つの温泉馬金山は大正十四年發見されたもので、鮮内で最も歴史の淺い温泉の一つである。

さて車を驅つて北上し忠清南北道に入れば温陽、儒城、道高、徳山、水安堡等の諸泉が散在する。

温陽温泉は其の温泉史の古い點で東萊と相比肩し得べく遠く百濟の時代より温泉地として知られ、李朝の代には世宗、世祖、顯宗、肅祖、英祖の如き屢々此處に幸し其の遺蹟や碑石は今尙温泉場附近に残されて居る。

儒城温泉は東國輿地勝覽卷之十七に『温泉。在儒城縣東三里。我太祖卜宅于鷄龍山。太宗講武于任實之時。浴于此』とあり今より五百年前にも既に浴舎の設けがあつた様である。

水安堡温泉は傳ふる所によればやはり埋没の憂目を見た温泉の一つである。今を距る約三百五十年前入浴中の一朝鮮女が浴槽中で死亡した爲部落民は之を天神地祇の祟りとして太古から存在した温泉を埋没した。然るに其後約五十年、偶々歩行の自由でない病人が温泉場の跡に草藁を敷き起臥する事約百日で自由の身體となつた爲温泉は部落民に依て再び掘鑿されたと云ふ。

徳山温泉には發見傳説があり、今より約六十年前足を負傷した鶴が水田中の或る個所に七十日間毎日やつて来て快癒の上立去つたのを部落民が不審とし、遂に温泉を掘りあてたと申傳へられてゐる。

北上の旅を續けて京畿道に入ると、温泉は一つとして見當らないのであるが、中村新太郎氏も記された様に昔は温泉があつたのかも知れない。之に就て中村氏は、『慵齋叢話に、我國六道、皆有温井。而惟京畿全羅道無之。古書云、樹州、即今京畿富平府。朝廷曾已遣人尋踏、而未得其源、抑人亦惡之而塞其源歟とある。私は嘗て京畿道漣川驛の南方で嘗て温泉の湧いてゐたといふ口碑のある谷側を試掘した跡を見たことがある。こゝは古生代(?)の砂岩を被覆して居る玄武岩地であつて、附近には南北走る斷層のある附近であるから温泉の湧かないとも限らない地點である。多分高温でなくても温泉が湧いた所であるのであらう。』

と記されて居る。

黄海道は朝鮮の温泉王國である。白川、信川、延安、馬山、三泉、達泉、松禾、安岳、平山と九箇所の温泉場が皆榮えてゐる。

白川温泉は白川邑誌に『漢橋川邊有温泉』とあり、又土地の傳説に高麗朝末期に郡守が王公貴賓來遊の繁雜なるを厭うて之を埋没したりと傳へらるるに力を得て昭和四年發見せられたものである。爾來、急速なる進展を遂げ今日では全鮮有數の温泉場になつて來た。

馬山温泉の發見傳説は一寸面白い。約二百五十年前長淵府使楊萬龜が任地に赴く途中此處を通過する際に馬夫に駢足を促した。通過後馬夫が不審に思ひ其の理由を尋ねた所が、楊府使曰く「當地は温水湧出地帯に付、歩行を緩めば馬蹄燒傷の虞あるに由る」と。部落民は此の言を信じて掘鑿し遂に温泉を得たと云ふ。

三泉温泉は數百年前の發見に係るものの如く、昔此の地は森林地帯であつて、負傷した虎が出て温泉に浴し病を癒したと傳へられてゐる。大正八年以前は野天の温泉であつたし現在もハンデー温泉(野天温泉)の別名が存する。

江原道は金剛山、葛山、白巖の三温泉を有してゐる。

金剛山温泉(温井里温泉)は外金剛の水晶峰、觀音連峯等の所謂一萬二千峰の麓に位置し誠に景勝の地である。今を距る約八百年前新羅の敬順王の子麻衣太子が政治的悲境を避け、當時皆骨山と呼ばれた金剛山に入山中發見したものと言ひ傳へられてゐる。景勝の地にあつて諸設備もよく東萊、海雲臺、温湯、白川等と相並ぶ温泉場である。

金剛山温泉の盛大なるに比して葛山、白巖はわびしい温泉である。共に交通が便ならず温泉地として榮えてゐるとは言へないが、未だ都人士の群に汚されぬかうした温泉がある事は何かこゝろよいものがある。

中村新太郎氏は『平海西白巖山下。泉湧山背之高丘。温煖適宜。泉甚澄潔。僧信眉大構室宇。糶糶米穀。施與往來沐浴人』との舊い記載を引いて南部江原道の旅中に立寄つた白巖温泉を稱へて居る。

葛山温泉には其の名もゆかしい傳説がある。今を距る四百年前李朝世祖惠壯大王が皮膚病を患ひ凡ゆる治療を施しても効が無い。所が一夜の夢に白髮の老女が現れ「小女は上八下八江に棲むものなるが大王の御病氣は醫藥のみにては其効なかるべし。依て龜塘山温泉を召さるべし」と言上し忽然として其の姿が消えた。大王大に喜んで直ちに其の温泉を調査せしめられた所、真冬の寒さと言ふに時ならぬ葛の花を見出し怪んで其根元を掘鑿した所温泉を得たと言ふのである。

筆者は江原道に旅する毎に、葛山行の乗合自動車は鐵原平野の玄武岩臺地から龜塘里の山峽に向けて消えて行くのを眺めうゝ、何時も此の傳説を思ひ出す。

東部北鮮に旅するものは此處にも數多い温泉を見出し得る。

朱乙は北鮮最大の温泉であるが、地名朱乙は女眞の語で温泉といふ意味の由であり、その發見の時代はよくわからぬが續關北誌には『錐峰温泉は府西三十四里に在り即ち今の温堡温水にして又之を温水と云ふ。藥水平陸岩石の竇に噴出し其の熱沸湯の如し。諸瘡疾の病浴洗すれば即ち癒ゆ。』と傳へられてゐる。

松興温泉に纏る傳説はやゝ怪異なものである。今を去る三百年前今の温泉地附近に人の手が地中より現れて人々は大いに恐れをなし之が地中に没する様祈禱し、又其の手に種々山海の珍味をさゝげたが仲々地中に没しない。遂に與ふるに火を以てした所漸く其の手は地中に没し鑛泉が湧出したと云ふ。

温水坪温泉の發見は新しく大正二年である。

殘るは西部北鮮であるが平安南北道は通計十箇所の温泉を有し、温泉數は可成に多い。

龍岡温泉は海岸に近く、蒸發殘渣が全鮮中抜き出て多いので有名であるが、東國輿地勝

覽卷之五十二には『温井』の項に、『在縣西三十里於乙洞。周二十餘步。水極温鹹。其西十餘步。又有泉周四尺。微温且鹹。又其西有冷泉。周三尺至鹹而深。咫尺之間。温冷迥殊』の面白い記載があり、朝鮮鑛泉要記には『三百年前は茫漠たる原野にして牧牛地なりしに地上に白氣の上騰するを見て之を掘鑿して温泉を發見すと傳ふ』と記して發見の動機がのべられてゐる。

終りに石湯池温泉の傳説は美しくも悲しいものであるが、西原辰城⁽⁹⁾兩氏の之に就て書かれたものを抜き書きして本章を終ることとする。

昔互に心をゆるし合うた男女があつて日夜戀し合うてゐたが、次第に世の無情の風が二人の上に吹きすさび、うるはしい夢もはかない涙にかはる事が多くなつて來たので、遂に二人は天國に永遠の平和を求めんと心を定めるに至つた。

『折しも滔々と湧き出づる温泉あり。つゝましよう立ち上る湯の氣の冲天に消ゆる様を打眺めつる二人はいみじくも心決めあじきなきうつし世のはかなきことを嘆きつゝうるはしき温泉の湧き出するほりにて交す微笑をこの世の名残に若き生命を斷ち天國となん申す處に旅立ちたりとぞ。かくてのち程に男の心はさすがに強くかたき石の姿とはなりて再び此の世にうちあらはれたる由にて其の石今も温泉の湧き出づるほりに累々たり。女人の心はさすがにやはらかく己が姿を眞黒き土となしこの世に未練をよめ今尙温泉のほり一面は眞黒き土にして附近の赤色を帯びたる土と著しき差異あるもことわりにこそ。このあたり今は水田となれるも今尙肥料を施すの要なく見事なる收果あり。これ女人の精によるべしと古女は申しはべるなり。男の魂の化身石ころの多きに依り此の温泉を誰いふなとく石湯池と申すやうになりたるなりとぞ。』(未完)

文 献

- 1) 今津明：中央試験所報告，第2回(大正6年)。 2) 中川虎太郎，石倉昇：中央試験所報告，第1回(大正6年)。 3) 駒田亥久雄：朝鮮地質調査要報，2(大正13年)，123。 4) 中村新太郎：地球，2(大正13年)，81, 91, 108, 119。 5) 立岩巖：朝鮮地質調査要報，8(昭和3年)，20。 6) 黄海道廳編：「黄海道勢一斑」(昭和6年)，附録，10。 同廳編：「黄道海の温泉」(昭和7年)，3。 7) 飯盛里安，吉村恂，畑晋：理化學研究所彙報，13(昭和9年)，1363。 8) 山澤三造：朝鮮化學會會報，6(昭和10年)，1。 9) 韓龜東，蔡禮錫，松下維光：朝鮮藥學會雜誌，19(昭和14年)，74。 里見卓郎，稻垣繁，竹中正夫：// 19(昭和14年)，154。 磯野義雄，春日河内：// 20(昭和14年)，19。 里見卓郎，稻垣繁，大塚朝夫：// 20(昭和15年)，55。 韓龜東，寺本健二，大塚朝夫：// 20(昭和15年)，101。 西原宇一，辰城正義：// 21(昭和16年)，31。 22(昭和16年)，1, 11。 稻垣繁，辰城正義：// 22(昭和17年)，40。 稻垣繁，松岡輝，辰城正義：// 22(昭和17年)，44。 稻垣繁，松平圭石，辰城正義：// 22(昭和17年)，50。 菊池直次，池田賢友，松岡輝：// 22(昭和17年)，55。 磯野

- 義雄, 春日河内, 茂木登: // 22 (昭和17年), 61. 磯野義雄, 辰城正義: // 22 (昭和17年), 73.
- 10) 衛生試驗所彙報: 第12號 (明治45年), 第34號 (昭和4年), 第54號 (昭和15年). 11) 須川
豐: 朝鮮醫學會雜誌, 27 (昭和12年), 1163. 12) T. Nakai: Bull. Chem. Soc. Japan, 15 (1940),
359. 13) 岩瀬榮一, 齋藤信房: 理化學研究所彙報, 21 (昭和17年), 767, 762. 14) 多賀谷
健夫: 理化學研究所彙報, 21 (昭和17年), 165. 15) 江本義數, 廣瀬弘幸: 朝鮮博物學會雜誌, 9.
(昭和17年). 130